

## 新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 河西 宏

平成二十一年を迎え、謹んでお祝辞を申し上げます。

旧年中は当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の研究旅行などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も各方面より注目を浴び、昨年は県市内外よりの来訪者は約三千人を数えました。また、平成元年以来発行してまいりました、特集「ながさきの空」も本年で第二十集となります。

本年も「長崎学」を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の発展に寄与したいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

平成二十一年

## 新たまの丑年を迎えて

理事長 越中 哲也

先ずは 新年を寿ぎ申し上げます。

私達が「ながさきの空 第一号」を発刊いたしましたのは、本会を創立して戴きました昭和五十七年五月より三ヶ月後の八月二十五日でした。其の後、昭和五十八年の新年号を発刊するとき、正月号には「何か正月らしい物を書いて下さい」との要望があり、長崎史談会幹事の高田泰雄氏に「長崎の正月に関係のある長崎俵物あれこれ」を書いて戴いた。そして次の昭和五十九年の新年号より私が「新たまの年を迎えて第一号」として長崎雑煮考を書いている。以来、昨年の平成二十年（子年）まで新年号には毎月正月に関する記事を中心に書かせて戴いた。

昨年は我が国の暦学の原点となった中国の暦法「干支」について述べ、其の干支の暦法によると平成二十年は「戊子」の年に当る。子は十二支の始めの文字であり、之を動物に当てると「鼠の事なり」と記

してあった。そこで今年（平成二十一年）の暦学書を見ると、十二支の戊の次は巳の文字を当て、我が国では之を「ツチノエ」と読み、文字に書くと「土兄」であると記してある。次に十二支による「子」の次の文字は丑の文字があり「音はチュウ」と読み、この文字を動物を当てると「牛なり」と記してある。

そこで古来より何故、十二支の子の文字に鼠を当て、丑の文字に牛を当て、寅の文字に虎をあてたのか……と言う事については、現在のところ「不明なり」と記してある。たゞ十二支は月の運行に合わせて名づけたとされるが、中国二千年前の暦法には夏曆、殷曆、周曆があり、日本で江戸時代まで使用していた旧曆は夏曆であると言う。また周曆は現在のヨーロッパ曆（太陽曆）に近いものであったと説明されている。

次に丑の文字を考えてみると、丑の古代文字の型は「𠂔」であり「子供が生れて始めて手をあげる様をあらわした物」で、「はじまる」という意味をあらわした文字である、と説明があり、其の証明に次の「六書正譌」の文があげてある。「丑 象子初生擧手」。

この事より丑の文字は「物をつかむ」の意に転じ、更に「糸をつかむ」と紐（むすぶ）になると諸橋漢和大辞典には説明してあるが、丑の文字が、曆の牛になった事については説明はなく、「爾雅」の文を引いて「太歳在丑 日赤奮若」と記してある。この「太歳」というのは、中国の古代天文学の語では天体の中心にある星であり、「現在の木星と言う」とある。更にこの星の丑の方向にある星を「赤奮若」と記してある。

ところで其の「牛」は、我が国の古代には居らなくて、縄文時代の末期に馬と共に大陸より渡ってきたものである。「ウシ」と言う言葉は、我が国で作られた言葉で「牛」の古文字は「𠂔」とあり、その文字を説明して、上は頭と角二本。中央の横線は肩甲、下は尾と記してある。そして古代は「太牢」と言い「諸侯は大祭の時、牛を牲にした」ので牛の上に𠂔をつけ牢（ロウ）と言う文字が作られたと説明してある。それ

これによつて、我が国・初期の牛が朝鮮大陸より渡ってきた地域の一つが、五島福江島であった事は大陸文化と我が長崎県との文化交流史を考えると大いに参考になるものがある。

次いで私は前号で、江戸時代我が国では牛肉を食べる風習はなかったが唯一出島オランダ屋敷内では牛肉が食べられていた事を記し、但し其の食用牛は日本の牛を食用とする事は許されなかったので、わざわざ毎年バタビヤから入港してくるオランダ船により運ばれてきた事も記しておいた。

今回は最後に全国にも広く祀られている「祇園さま」と牛頭天王の話を書いておく事にした。京都の「祇園さま」は清和天皇の頃国如法師が播磨の国より牛頭天王を京都八坂の地に祀った」と伝え、長崎の「祇園さま」は寛永三年（一六二六）佐賀出身の山伏高覚院（天台宗）が京都の祇園社を勧請し現應寺を創立（明治元年神佛混淆令により八坂神社と改む）している。然しこの牛頭天王については判然とした解説がない。我が国では「釈日本紀」所引の備後風土記等により北海より南海に渡ってきた「武塔神」が牛頭天王の本体であり我が国では素戔嗚尊であるという。又一説にはチベット佛教に「牛頭山に精舎を造り佛教を広め」たのが牛頭天王の始めであるとする。

然し、まあ、牛といえは菅原道真を祀った全国のどこにもある天満宮にある牛が一番印象的である。

### 風信

○毎週月曜の午前十時半より開催しております本会の長崎学講座、二月は寒いので休講とし、三月二日（月）より講座を再開します。

○但し、本会主催の古文書学研究会は世話役の宮田修二氏・川原清氏・大尾女史の熱意で寒さにもめげず二月も開催される由。二月は三日（火）十七日（火）の両日午前十時半より開催するので御自由にご参加下さいとの事（会費不要）

○本紙掲載の「牛の像」は、江戸時代唐船によつて持ち渡られ、俗に「マリヤ観音」と言われている白磁陶製像が作られた福建省泉州市より約三時間ばかり奥地にある徳化の地で宋時代より開かれた陶窯で造られた現代の作品です。



中国徳化窯「牛」

は、𠂔（ウカンムリ）は家をあらわす文字で、家畜として牛は早くより人に飼われていた動物であり、牲として使用されていた家畜の代表であったと言

う。中国で牛肉が食べられなくなったのは佛教が普及した唐時代からである。それは佛教の一つに牛頭天王がいたからであると考えている。それでは古代の我が国では牛肉を食べていたのであろうか。この事については関根真隆先生の著書が参考となる。

なる。それによると次のように記してある。（奈良朝食生活の研究）  
「古語拾遺」の牛穴食用の記事等から、すでに牛肉を食する風習が存在した事は疑いない。鋳方氏も食牛の風は支那、朝鮮と共通にわが国古代に存在していたと言われる（日本古代の家畜史）牛は奈良朝宝字四年（七六〇）二匹五七〇文、馬二頭九二五文で牛一匹は米約一石に相当した。

さて私は前回の牛年に当る「ながさきの空 一七四号」で大崎熊雄先生が発表された「長崎県の和牛」の事を一寸紹介したのみであったので今回は先生の論文で更に補足させて戴くと

福江市の大浜貝塚から箱式石棺風のものに人間の屍体と共に牛の遺骸が葬れており、死者の祭りに牛が一緒にいたという事は、この大浜貝塚が日本最古であると折紙がつけられたので今を去る二千二百年もの昔から、五島には牛が飼われていたことが考古学で明確になった事は五島牛の歴史を知る上で貴重なものである。

